

ジャガイモと映画 (37)

<栽培 (4)>

Web ジャガイモ博物館館長 あさ ま かず お
浅間 和夫

123. モスクワは涙を信じない

(英題: Moscow Does Not Believe In Tears)

1979年、ソ連映画。監督:ウラジーミル・メニショフ。

1950年代後半から1970年代後半にかけてのモスクワを舞台に、田舎から出てきた3人の女性を描いた物語である。彼女らは郊外のアパートで一緒に暮らすことになり、やがて友人となっていく。エカテリーナ(ヴェーラ・アレントワ)は学位を取得しようと努力する傍ら、工場で働いている。彼女はある知識階級のパーティで、カメラマンをしていたルドルフ(ユーリ・ワシエフ)と出会う。ルドルフはエカテリーナを誘惑し、やがて妊娠させるが、幼い子とともに捨ててしまう。

ここで映画は一気に20年の時を経過する。エカテリーナは娘アレクサンドラ(成長後はナターリヤ・ワヴィーロヴァが演じる)とアパートで住み工場長になっている。ある晩、エカテリーナが郊外のダーチャ(註)から電車で家に戻ると、ゴーシャ(アレクセイ・バタロフ)と出会う。二人は意識しあうが、想定外のルドルフの訪問を受ける。ルドルフはエカテリーナの工場における驚異的な生産実態を報道するため、ニュース制作スタッフの一員として派遣さ



写真1 エカテリーナとゴーシャ

れてきたのだった。ルドルフは娘の顔を見たいと願う。しかし、エカテリーナは自分が結婚する予定でいると拒否する。ルドルフはそれを聞き入れず、ゴーシャとエカテリーナ、アレクサンドラの三人が夕食を楽しむところに訪問する。ゴーシャは混乱してその場を立ち去る。消えた彼をエカテリーナとかつてのルームメイトたちは探すこととなり、友人の一人、アントニーナの夫ニコライ(ボリス・スモルチコフ)は酔っ払っているゴーシャを見つけて一緒に酒を飲み、エカテリーナの元に戻るようゴーシャを説得する。映画の最終シーンはエカテリーナの家の手所である。ゴーシャはスープを飲み、エカテリーナは目に涙を浮かべながら彼を見つめているのだった。

【註】この映画では『ダーチャ』が描かれていた。これは土地代がタダの家庭菜園

であり、給料が何カ月も遅れることが多かったソ連時代の土日はモスクワを空っぽにしてそこで野菜を栽培し、手作りのハウスで簡単で美味しい料理をし、一説では国のジャガイモの9割はここで生産された、とも言われている。本映画の題名は「泣いたところで誰も助けてはくれないものだ」という意味を持つロシアの格言であり、ジャガイモ絡みの古い諺には、『イモ（ジャガイモ）植えりゃ国破れてもわが身あり』と言うのがある。

124. クーデンホーフ光子

表題の女性はEUで最も有名な日本女性のひとりであり、私的にはオーストリアでジャガイモを栽培した人でもあるため、映画ではなく、1973年NHKの特別企画番組であるが、あえて取り上げることにした。

青山光子（吉永小百合）は、1874（明治7）年に東京市牛込納屋町に生まれた。父の青山喜八（加東大介）は、今日その地名が残るほどの骨董商を営む大地主。店の前で凍った水溜りに滑って転んだ男性、オーストリア代理公使の肩書を持つ、ハインリッヒ・クーデンホーフ＝カレルギー伯爵（ミヒャエル・ミュンツァー）を介抱した縁で結ばれる。両家の反対を押し切って光子21歳（1895年）の時、入籍に漕ぎつける。

夫のハインリッヒに帰国命令がでて、二人の息子（光太郎・栄次郎）をつれてオーストリアのボヘミア地方に行くことになる。さらに5人の子供を授かる。日露戦争が終わってから夫ハインリッヒが突然亡くなる。やがて、第一次世界大戦がはじまり、不幸にもオーストリアと日本は敵国になってしまう。しかし長男と三男を戦線に送り、



写真2 クーデンホーフ光子

自らは赤十字に3人の娘を連れて、てきばきと真心こめて奉仕する。

さらに注目したいのは、光子は領地の農民を指揮して、森林を切り開き、畑をつくりジャガイモを植え、収穫したジャガイモを借り切った貨車に詰め込み、男装して自ら監督しつつ、国境の戦線にまで運ばせたりする。ロシア軍に苦戦し食糧難にあったオーストリア・ハンガリー帝国軍の兵士達は、「生き身の女神さまの御来臨だ」と、塹壕の中で銃を置いて光子を拝んだとか。このジャガイモは終戦（1918年）後の飢えた民を救うのにも貢献した。そのようなことから、1919年パリのゲラン社は、“慎ましやかでありながら、強い意志を秘めた女性をイメージした香り”の「MITSOUKO（ミツコ）」という香水を創作販売した。
参考：NHK特別企画TV番組、1973、「国境のない伝記」「ミツコ：二つの世紀末」。

125. ポテト・キング うしじまきんじ 牛島謹爾

映画から離れるが、もう一人紹介したい偉人がいる。明治から大正時代にかけてカ

ルフォルニア州バークレーで、広大な畑でジャガイモを栽培し、同州の相場を左右していた実業家、牛島謹爾がいた。人びとは彼をポテト・キング（馬鈴薯王）と呼んでいた。彼の農場から生産されるジャガイモは100万俵にもなり、同州の全生産高の8割を超えることもあった。

彼は1864年、現在の久留米市^{うめみつまち}梅満町掛赤で生まれた。漢学者江崎済が現在の八女市上陽町北川内に隠遁し、北義塾を開いたので、その門下生となった。後に上京し、漢学塾二松學舎（現二松學舎大学）に入り、東京商業学校（現一橋大学）予科に進学する。

明治21（1888）年、渡米する。そこでアメリカ人の主食とも言うべきジャガイモに目をつけ、借地してジャガイモとタマネギの栽培を始める。当初は4人の共同経営であったが、ジャガイモの不作が予想されると、他の3人は彼に借金をかぶせて逃げってしまった。その後借金を返し、長いヨシが生え毎年水害にあう土地を改良し、いろいろな災害を克服し、ついに4万haもの耕地を切り開くことに成功し、カルフォルニアの全ジャガイモ生産量の8割以上を占めることもあった。やがて牛島は人々からポテト・キングと呼ばれるようになる。

そんな1906年4月18日早朝サンフランシスコが大地震に見舞われた。住む家が壊れ、食糧が不足する。早速、彼ジョージ・シマはパン、肉、ジャガイモなどの食糧をトラックに積んで、毎朝市民に無料で配り、喜ばれた。



写真3 牛島謹爾

また、1908年に結成された在米日本人会の初代会長として邦人の世話をよくした。人種的偏見からくる排日運動の緩和に努め、引き続きボランティア活動をするなど、大きな功績をあげた。日本人に自信をもたせるだけでなく、みすぼらしいアメリカ婦人を気楽に車に乗せてやるなど、親切で、曲がったことが嫌いで、あっさりした豪傑肌の人であった。一度事業にあたるときは、真剣にとり組み、品質のよいものの生産に努めたので、彼の信用は絶大であった。

若いときから苦労の合間に広い教養を身につけ、漢詩をつくるのが好きであった。雅号は別天とつけた。

彼が亡くなったのは大正15（1926）年、62歳（この年同じくカルフォルニアにいたルーサー・バーバンクも死亡している）。死後、その功績に対し、勲四等旭日章が追贈され、平成11（1999）年、出身地鳥飼小学校付近の梅満町の小公園に生誕地の碑が建立された。